

パーに自主的な姿勢が現れてきた。さらに、要介護者の死亡後のフォローもして、介護者はその後も会に参加した。すなわち、①会の運営をメンバーが行うことによって、自主的活動の変化を評価していくという方法がとられていた。自主的活動評価の具体的内容は、[会の運営：プログラム、参加の仕方]、[会員同士の連携・親密度]であった。

また、「身近なことで画期的なことが行われるから参加しないと損という感じがあった」、
「体験を語ることが即他の人が生かせる内容だった」などメンバー個人にとっても意義ある会に発展した。これらのことから、保健師は、②会が一人一人のメンバーにとって、どの様な意味を持っているか、評価していることが示された。

すばらしい社会資源なんですよ、この会が。痴呆の介護のすばらしいプロ集団になってきているんですよ。その会にお任せしておけば、私以上のアドバイスなんかもバンバンしてくれるんで。だから、そこを訪問の時に、そこを資源として紹介するんですね。そこに行ってみたい、参加してみたいとなると、入っていただいて。会は、新しい人来るから、先輩の人はまた、その人支えてあげられる立場に立つじゃないですか。新しい人は、また、そこで癒されて・・・

他の会に、たとえば他市の方とかでやっている会に参加している人もいて、その情報も自分の方から聞いてきて、教えてくれたりとか。自分たちも介護教室に参加したりして自分たちが勉強してきたことを、その場で、みんなで、教えあったり、……介護用品の日常の工夫をその場で、お互いに提供しあう場にもなってきたんですね。だから、身近で画期的なことがそこで行われているから、行かないと損だみたいなのもあって。安心してしゃべれたと思うんですね。

さらに、「メンバーは、みんなに役に立てたらという思いを持っていることがわかった」、
「メンバーの力をここでとどめてはいけない、いろいろなところで発展させていければと思った」など、メンバーの意欲は外にも向いていることを把握した。また、「立派なグループになったら終わりではなく、力を必要としている人が一杯いることをわかってもらおう」など、メンバーの活動が広がっていくことを支援した。

この方たちは、すごく、なんかみんなの役に立てたらとか、そういう思いを持っているのがわかったからかな……そういうのに積極的に参加して、「すごく喜ばれたのがよかったんだよ」、という話を聞いたりもしていたから。すごく力もある人たちだし、ここでとどめちゃいけない、いろんなところでやっぴかなきゃいけないというところもあったからか。でも、基本的にはこの人たちの生き方なかなって。「ここ手伝ってもらったときに、うれしかったんだ、だから自分たちもなんかやれたら」って言っていたような気もするんですね。

あとは、みんなが世界が広がって、いろいろな人とつながっているから、そこから、得た情報で動いて。

その他にも、「保健所の先輩保健師に会の方向性についてアドバイスしてもらった」など、

④他のスタッフや関係職種によるメンバーへの支援を得るという方法もとられていた。また、「ある会に参加する人がいなくて困っていることを伝えた」などメンバーの力が発揮でき、会の発展に寄与するであろう情報を提供し、「どう活動するかは、本人たちに決めてもらった」。このように⑤保健師は情報提供を継続し、判断はメンバーに任せていた。

「自分の力が誰かの役に立てばと、ボランティア活動に進んでいく」など、自分が癒されると自分の力をボランティア活動に広げていく人がいたこと、また、「様々な会に参加したり、シンポジストと呼ばれたりしている」など、活動が広がり、社会活動になっていったこと、さらに、「区長等から推薦を受け表彰された」など、他からの評価を受けたことから、⑥保健師は会の発展状況を評価していた。すなわち、その具体的な評価内容は、[活動の広がり]、[情報収集のための活動]、[会の運営]、[他者からの評価]であった。

(2) 他の地区での事業化を目標とする (表3-B-2)

この段階では、保健師は、《政策手法11 他の地区での事業化の可能性を検討し、次の目標を立て》ていた。

ここでは、さらに①他の地域での事業化の可能性を分析し、②実施可能性のある地区を判断し、次の目標をたてるという方法がとられていた。

今、受け持っているO地区は、昔からの農家で、お嫁さんとかいっぱいいるところで、ここでもできるかもしれないと思っている。というのは、訪問していて、介護者がかかえている悩みもあるのね。こっちの人もいて、ああ、あの人もそうだったんだという感じなんです。あそこの家のお嫁さんがこう言っていたとなると大変だから、結局あたりさわりのないように…、でも、その人同士が、今集まって話ししてるんだもの。だから、会場を、そこにしたってやれなかったことはないなど。

その時、どんなことで住民が悩んでいたり、この地域をどんなふうな地域にしたいのかなって、住民と共に思い描く思いがあればできると思うんですけど。

ほかの地区は、地域性とかあってむずかしいのかなって思ったりもしてるから、わからないけれども、いま、私がやろうとしているのは、その「痴呆を抱える家族介護者の会」がM地区にとどまらないで、大和町全体にしたいなというのがあったんで、大和町全部の介護者に声がけしているんです。

表3-B-1 事業が発展・拡大する時期

1) メンバーが自主的な力を伸ばし、会が発展する

具体的な政策手法	政策手法の分類
<p>① 会の運営をメンバーが行うことによって自主的 活動の変化を評価していく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会の運営：プログラム、参加の仕方 ・会員同士の連携：密接度 <p>② 会が一人一人のメンバーにとって、どの様な 意味を持っているか、評価する</p> <p>③ メンバーの意欲と力を把握し、社会活動も行 っていく会として発展させていくために支援 する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やる気のある人への支援 ・力を必要としている人の紹介 <p>④ 他のスタッフや関係職種によるメンバーへの 支援を得る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会の方向性への助言 ・メンバーへの評価（力があること） <p>⑤ 情報提供を継続し、判断はメンバーがする</p>	<p>9 メンバーの力の変化をアセスメントし、その 力を支援していく</p>
<p>⑥ 会の発展状況进行评估する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の広がり ・情報収集のための活動 ・会の運営 ・他者からの評価 	<p>10 会の発展過程を評価し、さらに支援していく</p>

表3-B-2 事業が発展・拡大する時期

2) 他の地区での事業化を目標にする

具体的な政策手法	政策手法の分類
<p>①他の地域での事業化の可能性を分析する</p> <p>② 実施可能性のある地区を判断し、次の目標を たてる</p>	<p>11 他の地区での事業化の可能性を検討し、次の 目標を立てる</p>

4. 保健師としての考え、姿勢

保健師は、様々な事業の実施という行動の背景に、町がどうあったらいいのかを常々考え、また、行政の立場や保健師としての基本的な考えを持っていることが明らかになった。

まず、事例Aにおいては、《政策手法14 町がどうあったらよいかという理想的な姿を考え、現状を分析する》、《政策手法15 保健師または行政的対応への基本的な考え方を持っている》という方法をとっていた。(表4-A)

いつの時点から介護予防って言葉使ったんですけど、生きがいか、体力、気力とか維持するには、一人で家にいるよりか、住み慣れたところで知っている人たちとお話し合いということが一番大事になってきたんだなあ。

昔はそんなに長生きしてなくて、死ぬまで現役で働いている人たちがいっぱいですよ。ところがそういう仕事が、少しずつなくなっているとか、ますますないとか。趣味とかそういうことでの生きてきた人ってあまりいないですよ。

このように、保健師は、日常の活動を通して、今後の①住民の生活のあり方について考え、さらに、このようなあり方から、「T町には施設もサービスもない」、「T町は考えるのが遅かった」など②T町の高齢者対策における問題点を分析していた。

また、「保健師活動の基本は住民から教えられる」「保健師は住民の声や感じていることを知ることができる」など③日常の保健師活動から住民の声を把握するという考えを持っていた。また、「住民の自主的活動から学んだ」「必要なことは住民が言うてくる」など、④住民の声から地域に必要な活動を把握するという考えを持っていた。さらに、「住民の要望のない事業の実施や行政の押しつけではだめ」「事業などを始めるときには住民の実態から」など、⑤住民の活動や住民の実態を生かした活動をするという考えを持っていた。

保健婦活動の基本というのは住民から教えられるというか、必要なことのニーズを住民が言うてくるんですよ、言うてくるというかああ必要なんだということは住民の人たちがやっていることを行政に生かすという、私はそういう姿勢でやってきているんですね。何か始めるときには、住民の実態から、そういうのをやらなきゃいけないというのが、私の基本的な考えだった。

住民の声とか状況を肌で感じるところが、保健婦はちょっとね、感じられるというか。

ま、急浮上ではなかったけれど、着実に増えて行ったこともあって。それは、そういう必要なところをきちんとわかってというか、理解してやってるからかなと思うんですよ。住民の要望がないやつをやるというのは、ちょっとね、行政の押し付けではだめかな、という感じはしてるのね。

また、「内容や流れについてはそれぞれの行政区で自主的に取り組むことが基本的な考え」「住民がやっていることを行政に生かすという姿勢でやっている」など、⑥住民が自主性を持って取り組み、それを事業化するという考えを持っていた。

中身的には、それは行政区の中でいろいろ自主的に取り組んでいただきたいというのは基本的な考えでも、ちょっと目的とか、どういう事業内容にしたらいいのかというのをちょっと……私は行政屋でも事務屋でないから、保健婦とか社協さんとか町の福祉担当の人のアドバイスを得ながらちょっと作ったんだけど。事業化しないと定着しないから、そんなところまで考えて、これは町で一応、補助金化するので。

表 4 - A 保健師としての考え方、姿勢

具体的な政策手法	政策手法の分類
① 住民の生活のあり方について考える ② 理想的な姿から見た町の実態を分析する	14 地域がどうあったら良いかという理想的な姿を考え、現状を分析する
③ 日常の保健師活動から住民の声を把握するという考えを持っている ④ 住民の声から地域に必要な活動を把握するという考えを持っている ⑤ 住民の活動や住民の実態を生かした活動をするという考えを持っている ⑥ 住民が自主性をもって取り組み、それを事業化するという考えを持っている	15 保健師または行政的対応への基本的な考え方を持っている

事例Bにおいても、事例Aと同様に、《政策手法12 どうあったらよいかという理想的な姿を考え、現状を分析する》と《政策手法13 保健師または行政的対応の基本的な考えを持っている》という基本姿勢で活動していた。さらに、《政策手法14 住民の力を感じ、住民から学び、保健師としての力量を付けていくことに喜びを感じている》ということが、保健師としての活動の原動力になっていた。(表4-B)

まず、「介護を自分がやるのが当たり前と背負い込んでダメなのではないか」、「みんなで負担を分け合って、地域でみていけたらいい」など、〈介護負担を家族が担うのではなく、地

域でみていく〉という考えを持ち、①その地区がどうあったらよいか、理想的な姿を考えていた。また、当時そのような会はなく〈町での介護者の会の必要性を感じていた〉と②地区の実態を分析していた。このような日常から、町のどうあったらよいかという考えが、新たな事業の必要性の発想につながっていた。

また、全ての事業を通して、③行政がやるべきことを判断する、④住民ができることを判断し、それは住民が担う、⑤住民の力を引き出す行政運営ということについて考えていた。まず、保健師は、「行政の立場だから知ることができるが、行政や保健師が全部抱えられることではない」と判断していた。また、「保健師ができることと住民ができることは違う」と考え、「自分がやれないこと逆に住民に担っていただいた方が良い」「良い介護をするためには住民を巻き込むことが必要」など、「住民ができることを住民が担うために住民を巻き込む」と考えていた。さらに、「いかに住民の力を引き出してくか、行政運営につなげていくかが必要」と、住民の力を引き出す行政運営について考えていた。

今回の面接で、事例Bに見られたのは、《政策手法15 住民の力を感じ、住民から学び、保健師としての力量を付けていくことに喜びを感じている》ことであった。

やっぱり、手紙だけじゃ、来ないんですよ。その人とつながらないと。……他の地区でも、すごく、おもしろく介護のすばらしい方を見つけたの。何があってもそこに来てくれる人いるんです。やっぱり、そういう人間関係おもしろいんですよ。その方も、そこで自分の痴呆のおじいちゃんとのやり取りを語ることで、他の人が、おお、すばらしいね、ということになって…実際にコタツから離れないで、デイサービスに行かないって言っているときにどういう声がけするの?といった時に、すごく、すばらしい表現をしてくれる方いるんですよ。そんなのって、みんなの身近なところで、即、即生かせるような表現だったりもするから、すごいなと思って。その会につながっていけば、楽しいだろうなと思ったりして。すごいですよ。やっぱり。

すなわち、⑥住民の力に魅力を感じ、その住民に保健師として関わることに喜びを感じ、また、「介護について住民から学んだ」、「住民からの学びや、出会った人との関係がうれしく、おもしろい」など、⑦活動をとおして、一人の保健師として学び、喜びを感じていた。

表4-B 保健師としての考え、姿勢

具体的な政策手法	政策手法の分類
① その地区がどうあったらよいか理想的な姿を考えている ② 理想的な姿からみた地区の実態を分析する	12 地域がどうあったらよいかという理想的な姿を考え、現状を分析する
③ 行政がやるべきことを判断するという考えを持っている ④ 住民ができることを判断し、それは住民が担うという考えを持っている ⑤ 住民の力を引き出す行政運営についての考えを持っている	13 保健師または行政的対応への基本的な考えを持っている
⑥ 住民の力に魅力を感じ、その住民と保健婦として関わることに喜びを感じている ⑦ 活動をとおして、一人の保健師として学び、喜びを感じている	14 住民の力を感じ、住民から学び、保健師としての力量を付けていくことに喜びを感じている

V. 今後の研究の課題

分析した2事例において、共通していたのは、『地域住民の実態を把握し、対策の必要性を感じ、対策を思案する時期』、『対策案を実施し、事業が定着する時期』、『事業が発展・拡大する時期』および『保健師としての考え方、姿勢』を持っているということであった。

しかし、政策手法においては、かなりの違いも見られた。そこで、この4つに分けて、今後の課題を述べる。

1. 地域住民の実態を把握し、対策の必要性を感じ、対策を思案する時期

この時期では、住民の現状を把握し、住民の視点から対策を考えるという方法は同じであった。しかし、事例Aは、高齢者の老後がどうあったらよいかという視点から対策を考えていたが、事例Bでは、介護負担や痴呆の問題など、問題状況を把握して、その問題解決のための対策として、対応していた。この2つは、保健師が地域活動をしていく上で特徴的なアプローチであると考えられる。つまり、問題を見いだして問題解決のために対応するという方法と、問題という視点ではなく、あり方を考えながら目標設定していくという方法のどちらかに分かれるのではなく、地域活動においては、両方の手法が用いられている

ことが示唆される。

一方、「A-1-①、B-1-①住民の生活の実態を把握している」、「A-1-②実態からどうあったらよいか対策を考えている」など、抽象的な表現があり、具体的にどの様に把握したのか、対策案はどのように見いだされたのか、具体的な手法は見いだしていない。今後、詳細なデータ収集と分析を繰り返し、具体的な手法を見いだしていく必要があると考える。

2. 対策案を実施し、事業が定着する時期

この時期は、2事例共に共通していたが、その具体的内容や手法は全く異なっていた。つまり、用いる政策手法は、事業によって、かなり多種多様であることが示唆される。しかし、今回は、2事例の結果であったために、どの程度に多種多様なのか、その実態は明らかにされていない。また、事例Aと介護予防教室、事例Bとその他の家族の会など、同種類の事業の場合、同じ手法が用いられるのかについても、明らかにされていない。具体的な方法論における事業毎の独自の部分と共通部分を明らかにしていく必要がある。

また、今回は、運営方法やルールなど、具体的なレベルの手法から、「住民の悩みを受け止め、解決の糸口を見いだすようにする」など“あり方”“考え方”の次元のものまで、同じ政策手法として分類した。今後、事例分析を継続していくことによって、具体的な手法を充実させ、次元の異なる手法についての解明をしていく必要がある。

3. 事業が発展・拡大する時期

この時期においても、具体的内容や手法は全く異なっていた。しかし、目標を設定していること（A-13-①、B-11-②）や、住民の状態から実施の可能性を分析する（A-13-③、B-11-①）ことは、共通していた。2と同様に、さらに他の事例を分析することによって、事業によって異なる手法と共通する手法を明らかにしていく必要がある。

4. 保健師としての考え方、姿勢

《地域がどうあったらよいかという理想的な姿を考え、現状を分析する》、《保健師または行政的対応への基本的な考え方を持っている》という手法は共通していた。つまり、住民の実態を把握し、住民にとって必要な事業を実施して、その事業を発展させていくという保健師の力量を問う際には、その保健師が、地域がどうあったらよいかという理想的な姿をどうとらえ、現状を分析し、保健師として、または行政的対応とは何か、考え方を持っているということが左右していると考えられた。しかし、今回の分析では、「A-14-①住民の生活のあり方について考える」、「B-13-①その地区がどうあったらよいか、理想的な姿を考えている」など、抽象的なレベルにとどまっている。今後、このカテゴリ

一の内容に焦点を当てて、詳細な分析を行っていくことにより、保健師の地域活動の原動力となるものは何なのかを明らかにすることも可能ではないかと思われる。

また、《住民の力を感じ、住民から学び、保健師としての力量を付けていくことに喜びを感じている》という思いも明らかになった。これは、職業的アイデンティティにも大きく影響し、保健師としての自己効力感にも関連する事柄であると考えられる。これらの考え方や姿勢が、一人の保健師としてどのような職業的発達に関連し、また、活動への原動力となっているかを明らかにしていく必要があると考える。

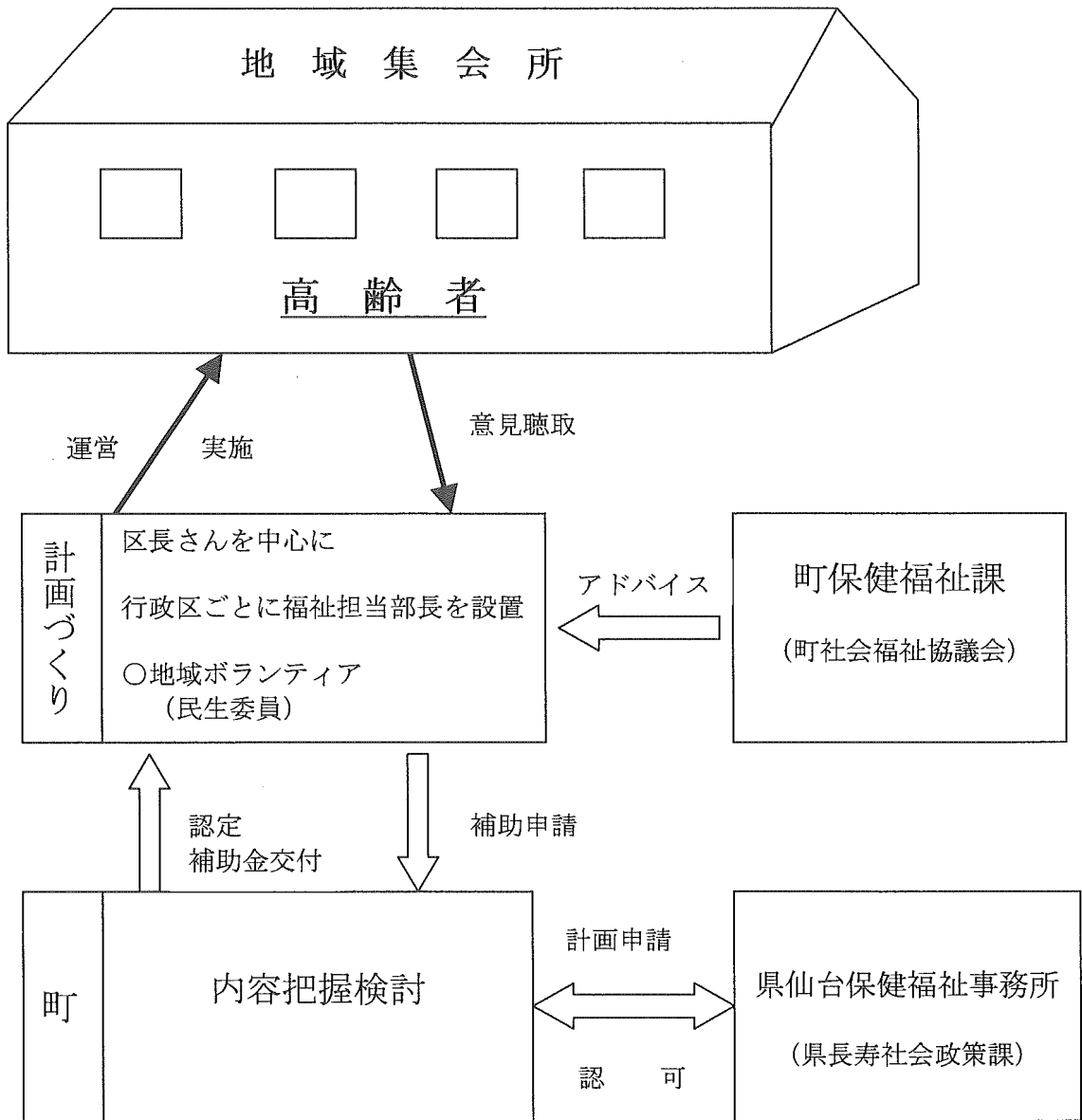
資料1 「となりぐみ生き生きサロン」の概要

1. 目的	<p>住み慣れた地域において、その地域の人々と共に老人が集い、各種サービスを受けるとともに、地域で培った諸経験を後世に伝承するなど、地域全体の活力の創出と連帯感醸成を図るものとする。</p> <p>①老人生活の助長、心身機能の維持向上 ②在宅寝たきり老人の予防と自立の促進 ③老人の社会的孤立感の解消 ④家族の負担の軽減 ⑤ボランティア育成と地域介護力の高揚</p>
2. 対象者	65歳以上で介護を要する者および75歳以上で各行政区内に在住する者
3. 実施主体	各行政区および行政区単位のボランティアグループ
4. 事業内容	<p>①生活リハビリ ②食事会 ③介護相談 ④健康教室 ⑤季節の行事 ⑥園芸教室 ⑦趣味の教室 ⑧老人介護</p>
5. 運営	<p>①事業の実施については、地区の代表者（区長など）を通じて周知する ②目的達成のために各関係機関、組織、団体等との連携を図り、在宅ケアに関する諸事業と結ばれるよう運営する ③ボランティアの参加を容易にし、運営されるよう努める ④必要な書類を整備する</p>
6. 実施内容	行政区ごとに年間計画を作成し実施する

資料2 「となりぐみ活き生きサロン」ができるまでの経過

経過	地区の概況	町および保健婦の取り組み
H3、4 から	高齢者が増加 老後の仕事がなく、趣味のない人が多い 老人クラブを辞めた人たちの「お茶飲み」会があった。 近くの集会所に集まって「お茶飲み」話がしたいという住民の意見が出る	住民の現状から対応の必要性を把握し、対応策を考える
H 4		大和サミットで大和の福祉の概況を説明 デイなど福祉の活動は何もない旨を説明
H5～7		保健福祉計画立案 保健福祉センターの設置計画 管理者研修で福祉施策のレポートを作成
H 8		県のモデル事業、ミニデイサービスを1行政区 に対し実施 その後、町の事業として継続することになる
H 9	「活き生きサロン」が開始 「活き生きサロン」9行政区で実施	「活き生きサロン」計画実施の説明を行う。 ①全体会 区長会、保健推進員の会議の場で保健婦と課長で企画について説明。その後、実施の意思を表明した行政地区に対し、役員会で説明する。 ②役員会 行政地区の老人会、民生委員、食生活改善員、保健推進員等に対して保健婦が基本方針、補助金等について何度も地区に出向いて説明する。
H 10	「活き生きサロン」19行政区で実施	前例（「活き生きサロン」実施行政区）の紹介 全体会で働きかけをする
H 11	「活き生きサロン」21行政区で実施	介護保険の立ち上げと保健福祉センター発足
H 12	「活き生きサロン」24行政区で実施	
H 13	「活き生きサロン」32行政区で実施	

資料3 「となりぐみ生き生きサロン」のしくみ



資料4 「野の花会」ができるまでの経過

経過	地区の概況	保健婦の取り組み
H2	新興住宅団地ができる	
H5.10	ヘルパーからの紹介で脳血管障害後遺症で日中独居のケースを知る 地区の民生委員や保健推進員から同様なケースの相談や介護者が1人で悩んでいるケースの相談等が持ち込まれる	訪問でケースの状況と地区の実態把握
H6.2	地域の中に介護を必要としている人が増えてきた 介護者が1人で悩んでいるケースが多い	家庭訪問 1ケースに対して他のケースとの共同訪問の了解を得て実施する 他のケースも紹介する
H6.10	「野の花会」結成	「野の花会」への支援

資料5 事例A:「となりぐみ生き生きサロン」について
住民の実態を把握し、対応の必要性を感じ、対策を思案する時期

コード	カテゴリ	具体的な政策手法	政策手法の分類
1	高齢者が増えてきた		
37	昔は、現役で働いてきたが、今は老後の仕事がなくなってきた	町の高齢者の実態、老後の生活の現状を把握していた	住民の現状から対応の必要性を把握し、対策案を考える
38	趣味で生きてきた人があまりいない		
10	老人クラブ会員の60歳はまだ若い		
16	老人クラブの前期高齢者と後期高齢者の実情		
2	後期高齢者が集まる場がほしい	高齢者が集まる場が必要であると考える	実態からどうあったらよいか、対策を考えている
36	住み慣れたところで知っている人たちが集い、話す場が大事		
39	歳をとり仕事が無くなった人が集まる場が必要		
40	自分も年をとってからそういう場が必要		
17	老人クラブを辞めた人たちのお茶のみ会		
5	若い老人が後期高齢者を支えていけばいいという考えがあった	高齢者が集まる場をつくるための方法や内容も考えていた	対策の具体的な内容や方法を考えている
6	若い人たちは現在の家庭での役割を果たす		
11	年に1回の旅行のような活動ではなく		
13	老人クラブを中心に後期高齢者の人たちのボランティア活動を考えていた。		

3	集まる場がほしいという住民の声が聞こえてきた	同じ考えを持っている住民の声が聞こえてきた	住民の観点から、対策案の妥当性を判断する
8	40-50歳代女性からも生活をどのようにしたらよいか、声が聞こえてきた		
19	こうなのがあればいい(老人クラブを辞めた人たちのお茶のみの会)と高齢者からも言われた		
44	開始する4、5年前から住民の声が聞こえ始めた		
12	自分の考えとかみ合った(前期高齢者がもう少し社会に貢献すること)	住民の声から自分の考えていることへを検証する	住民の声から、考えている案の妥当性を検討する
18	住民はこれを求めている		
25	やはり、そのような活動が必要になってきたのだ		
26	事業の必要性を具体的に見せつけられた		

対策案を事業化して、事業が定着する時期
 対策の必要性を表明し、理解してもらいながら、事業化の機会を待つ

コード	カテゴリ	具体的な政策手法	政策手法の種類
14	研修で考えをレポートに書いた	自分の町の問題点をまとめ発表した	対策の必要性を表明する機会を活用し、理解を得る
46	他県他町との交流会でT町には何もないことをアピールした。		
47	T町の代表として概況を発表した		
48	T町の現状（問題）に対して他町の人から意見を言われた	自分の町の問題点を他の人からも指摘される 第三者に言ってもらう	第三者の評価・助言を活用する

コード	カテゴリ	具体的な政策手法	政策手法の種類
43	開始する4、5年前からちよつとずっと考えていた	案は数年前から考えていた	実現の機会を待ち、実施のチャンスを判断する
138	考えていた期間から10年ぐらいいになる		
146	平成3、4年は頭で考えてたとき		
147	平成5、6、7年ではいろいろ考え出した		
27	前から考えていたのでやろうということで始まった	以前から考えていることを実現させる時になった	実現の機会を判断する
32	自分も考えていたことなのでやりましようということになった。		
49	介護保険制度の話が出てきて動き始めた。	介護保険制度導入の論議がきっかけとなった	（制度改革や新たな施策を活用する）
50	介護保険制度が導入されるということは大きかった		

施策化のきっかけづくりをして事業継続へつなげる時期

コード	カテゴリ	具体的な政策手法	政策手法の分類
28	県のモデル事業を活用して、実施のきつかけとした	県のモデル事業を活用して、実施のきつかけとした	モデル事業等実施のきつかけとなる事業を活用する
29	きつかけ作りは県のモデル事業		
30	県のモデル事業を町で継続するのがいい。		
42	県のモデル事業後、町で実施することになり動き出した	県のモデル事業を継続することにした	
148	センターを建設（ハード）という町の計画にのせて計画を立てた	町の各種計画にのせた	保健福祉計画等の各種計画に明示する
149	保健福祉計画を作るという国の支援もあって計画にのせた		
150	福祉行政を考える時期だった		

事業開始し、事業を定着させる

コード	カテゴリ	具体的な政策手法	政策手法の分類
88	最初の地区は保健婦として何度も行っていてわかる地区にした	最初の事例が重要であり、成功するような地区を選ぶ	最初に実施する地区を選定し、実施方法を共に考える
90	最初の地区は大きな行政区ではない	・人口規模、面積が大きすぎない	
91	最初の地区は保健婦活動によって下地のある地区で行った	・保健婦とのつながりがあり、活動の進んできている地区	
92	最初の地区は他の事業でも協力的な地区	・種々の活動に協力的	
93	最初の地区は地域の人たちの顔が見えていた		
94	最初の地区は保健婦とのつながりができていた		
62	ちょっとずつ前に進んだ。	最初は打ち合わせを繰り返し、少しずつ進む（手探りしながら考える）	
87	最初の立ち上げでは私もどうしたらよいかわからなかった	話し合いを通して方法を学ぶ	
95	最初の地区では何回も打ち合わせをして学ばせてもらった		
88	最初の時には夜に出向いて区長と何回も話し合った。		

64	区長会や推進員の会議で話をして理解してもらおう	はじめに、区長の全体会で説明した	はじめに地区のリーダーの理解を得る	事業について住民の理解を得る
65	最初リーダーの人たちに話をする			
98	区長（リーダー）に声をかけて話をした			
84	区長に説明し区長が呼びかけ代表の方に集まってもらって二段構えに説明した	区長の理解を得た後に、地区の役員の人に説明した	地区のリーダーの理解を得た後に各役員の理解を得る	
85	全体会として区長に説明し、次に役員会の人に説明。			
125	推進委員、食政、民生委員にも話をした			
99	全体会で区長の了解が得られたところから説明会を行った			
73	老人会、民生委員等の代表の人への説明会で区長さんほうちの地区で取り組みたいと言う。	区長が説明会で意欲を表明した	リーダーの言動を活用する	
67	実施を迷っている地域には何度も説明に行った。	実施の意思を表明した地区には何度も出向いて、説明に行った	何度でも地区に出向いて説明する	
68	行政区毎に説明に行った。			
70	リーダーに話をするだけでなく行政区にも出向いて説明した			
77	決まったらボランティアへの説明も地区に出向いて行った			
96	実施したいという地区への打ち合わせには全地区に行った			
69	どの様に取り組んだらいいかの流れ図を書いて説明した	取り組みの流れ図を書いて説明した	事業についてのわかりやすい資料を提示する	
71	役員会では実施するか否かから協議してほしいと依頼した	実施の有無は住民によって自ら決めたもだった	住民に決定をゆだねるように形作る	住民主体で実施する
76	行政区内の実施についての協議の場を設けた			
75	協議には保健婦は同席せず、みんな決めてもらった			
66	やってみたいという地区に名乗りをあげてもらおう。	住民が実施を決めた地区にのみ対応する	実施を決定した地区にのみ、その後の対応をする。	
97	最初の説明には手を挙げたところにしが行かない			
86	実施すると決まったら自分たちでプランを立てて予算の話し合いに持っていき計画を立てるために住民みんなで話し合った	計画を立てるために住民みんなで話し合いを持った	住民自身が実施計画について話し合う機会を作る	
74	区長がやるわけではないのでみんな話をする			

58 住民は何をやったらいいのか悩んでいる。
 57 他のグループの見学や交流も考えていた。
 59 活動的なところを育てるために他の活動に参加
 60 活動的なところを育てるために他の活動と一緒にやれることを考えた

事業開始に向けての住民の悩みを把握 住民の悩みを受け止め、解決の糸口を見いだすよう支援する
 住民が自主活動の力をつけるよう支援する

他のグループの見学や交流を考えた
 活動的な姿勢を育てるために他の活動に参加できるように工夫した
 社会資源の利用やグループ間の交流を通して力をつけるよう支援する

103 人口が多い行政区ではボランティアを募る、配置するなどの異なる対応をした
 行政区の特性によって、対応方法ややり方を変えた
 行政区毎の特性や地区住民のやり方を生かす

111 実施までのやり方は地区によって全部違う
 実施の方法は地区特性によって変える
 ・ボランティアの募り方、配置、期間

109 多めにボランティアを募るところもある
 ・案内の方法、班の編制

113 ボランティアを募る方法も一つ
 ・活動する地区の大きさ

114 大きくない地区は委員などのグループがありボランティアを募らない
 ・保健師の介入の程度

115 固定したボランティアで行っているところもある
 行政区の福祉部長が受け持っているところ、老人クラブが請け負っているところなどいろいろ

117 ボランティアはその都度、月単位、年間を通してと、地区によっていろいろ
 行政区によって案内の方法、班の編制、やり方を工夫した

118 行政区の福祉部長が受け持っているところ、老人クラブが請け負っているところなどいろいろ

105 行政区によって案内の方法、班の編制、やり方を工夫した
 行政区毎に住民たちが工夫してやり方を変えた

119 小さい行政区は併せて一緒に行っているところもある
 行政区によって住民が自分たちで工夫した。

110 割り当てていくぐいとやるところもある
 行政区によってそれぞれに工夫してやってくれる

106 行政区によって住民が自分たちで工夫した。
 人をどうするのかも自分たちで決める

104 行政区によってそれぞれに工夫してやってくれる
 老人クラブの前期高齢者を活用しようと考えていたが実際は違った。

112 人をどうするのかも自分たちで決める
 老人クラブの前期高齢者を活用しようと考えていたが実際は違った。

事業実施に関する行政組織内の対応

コード	カテゴリー	具体的な政策手法	政策手法の分類
31	課長も県がやった仕事なので良いことではないかという意見だった	課長から事業への賛同を得て、一筋に上司の理解を得て、共に対策を考える	組織からの理解を得て、それぞれの役割を明確にする
51	課長と自分で考えた。		
100	区長会の時は課長が説明した	課長と自分の役割を明確にした	職位に応じた役割を明確にし、組織的に活動する
135	全体会は課長と私が参加し課長しか話さない。		
136	担当者の会議では私、または福祉担当者と参加し、話もした	職位に応じた活動を行った	
137	取組みは課長と私		
52	保健婦に負担をかけない形で行った。	事業にネガティブな印象を与えない	スタッフ間の協力体制を作り、過重な負担にならない方法で実施する
55	負担にならないような自主グループという形で	他のスタッフの負担にならない方法を考えた	
56	社会資源を利用して負担にならないように考えた		
53	年に何回かは保健婦（スタッフ）にも行ってもらおう		
54	社会福祉協議会など、関係者みんなまで応援しあう	関係者間の協力体制を作った	

63	活動を決めたら予算の対応をした	予算の対応をした	事業化するために必要な行政的対応をする
83	町で補助金化する		・予算化、要項づくり
80	いろいろな人のアドバイスを得ながら事業要項を作成した	関係者の協力を得て事業要項を作成した	・関係者の協力を得て行う
79	好きな用語ではないが事業内容を書いた		
82	事業化させるために事業要項を作成した		

事業が発展・拡大する時期

コード	カテゴリ	具体的な政策手法	政策手法の分類
101	初年度は9地区から		
120	議会からも言われるし、2年目の時はとにかく倍にしようと思ってやった	目指す実施地区数を考えた	実施地区数の目標を持つ 事業拡大を計画し実行する
133	半分までは頑張る		
121	2年目で9地区から20地区に増えた	その時々の実施地区数の分析をした	実施地区数の現状について分析する
129	11年は増えなかったがすでに21カ所でやっているから	停滞要因	
128	(私は) 参事になって担当も代わり、増えなくなった	人が代わり、役割が変わると増えなくなった 他の業務が忙しくなると事業は増えなかった	・スタッフが代わる ・優先する他の事業が増える
127	介護保険の導入や福祉総合センターの設置のためこの事業は増えなかった。		
131	課長が代わりセンター立ち上げ等で忙しくなった。		
130	手簿になった後、課長が代わり増やさなくちゃいけないということに。		
144	構想を練っている頃の課長とは考えが合っていた	上司との考え・意見の違い	・上司の考えや意見の違い
145	課長と裏腹でやっていた時はひどかった		
132	今年から課長が代わり説明に行って立ち上げた。		
141	着実に増えていったがそれは必要などころをわかってやっていているから。	この事業を必要としている地区を把握していた	促進要因: 必要な地区を把握している
142	着実に増えていったが必要などころを理解してやっていているから		
102	職員が中心になる活動をしていたところではやりにくかった。	実施が難しい地区を判断をした	地区特性から実施の可能性をアセスメントする 実施困難な地区
108	強い人達がいる地区は喧々囂々という状態になる		
134	あと半分は行政区での都合がいろいろある		・行政主導の活動をしている地区
107	自主的といってもいろいろいる人がいるからまとめることが大変		・主張の強い人がいる地区 ・まとめることが難しい地区
122	前例を紹介すると、住民から自分たちの地区ではやらないのかという要望が出て前例を紹介することによって住民から要望が出た		実施地区を増やすために対応する
123	自分たちの地区でやらないと住民から要望がでて、区長に催促する。	住民は要望を区長に催促した	・前例を紹介し、住民のニーズを高める
124	毎年区長会で働きかけている。	毎年区長には働きかける	・住民自ら要望をリーダーに伝えて、リーダーを動かす ・毎年、関係者に具体的な説明をして働きかける
126	上司が代わって考えが変わったらしいところも話した		